

番号	日付	校区	発言者	質問・意見概要	教育委員会の回答・考え方
1	11.14(日)	山滝	発言者A	<p>現在、私の住む地域から通学する山滝中学校の生徒はほとんど自転車で通学している。以前ホームページから質問したことがあるが、当時、スクールバスの導入についてはまだ何も決められていないという答えをもらった。今の計画（案）においても、具体的なことは書いていない。</p> <p>今くらいの時期だと、17～18時には真っ暗な中、自転車で山道を走って帰ってくる。その点に関してどういう風に考えているのか。現在もバス通学に際して一部補助はあるが、一部だけになる上、部活動も考えると自転車の方が便利だから、と自転車通学を続けているのだと思う。</p> <p>自動車で横を通り抜けるのも危ないと感じるし、また、過去災害のあったあたり、夕方どのような状況か把握しているか。一度自転車で見に行ってほしい。普段の通学状況がよくわかると思う。</p> <p>人数が少なくなる中、統合されていくということはわかるが、現在の中学校に学校の場所が移ることで通学の距離が延びること等を考えると、保護者も不安に思う。仕事をしている保護者も多い中、送迎も負担があると思うがどうか。</p>	<p>スクールバスについては、実施計画（案）の中にもあるように、児童生徒が通学にあたって安心安全が保てない状況であれば、他地域との均衡にも配慮しながら導入していくことを考えている。</p> <p>具体的にどの地域までスクールバスを運行するのかという点については未確定だが、今後、地域の方々と協議を重ねる中で、安心安全に通学できるためにはどのくらいの距離や地理的条件で導入し、どのルートを走るといった詳細を決定していきたい。</p> <p>特に低学年の児童が長い距離を、また早くに暗くなるような時期において、歩いて通学することは好ましくないと考えているため、やはり安心安全が保てない状況と判断すれば、スクールバスを導入していきたいと考えている。</p> <p>なお、国による基準では小学生で4km以内、中学生で6km以内という目安はあるが、それを画一的に当てはめるのではなく、市の教育委員会として、岸和田市の子どもたちの安全を守る姿勢で対応していく。</p> <p>中学生の自転車通学もそうだが、現状の通学が適正化を進めるにあたり、危険を伴う状況にあるということであれば、見直しについて対応する。</p>
2	11.14(日)	山滝	発言者A	<p>防犯カメラの設置といったことも考えているのか。この地域は設置台数が少ない。そういった現状も踏まえて、事が起きてからでは遅いという視点で考えてほしい。</p>	<p>スクールバス導入を含む安全対策については、（仮称）学校開校準備委員会において、地域の方々からいただくご意見を参照しながらしっかりと取り組んでいきたい。</p>

番号	日付	校区	発言者	質問・意見概要	教育委員会の回答・考え方
3	11.14(日)	山滝	発言者B	<p>適正規模について述べているが、それ以外の規模ではダメだということはない。教育学から見て、適正規模というものに意味はない。小規模校は教育的効果が低いという実証された根拠はない。抽象的な言葉で示されているだけだ。</p> <p>岩手県において、所謂へき地校と県の平均学力の分析を実施しているが、複式学級のへき地校の方が学力が高いと発表している。文科省の調査においても、全学年単学級の中学校の方が、国語・数学で全国学力テストにおける全国平均を上回っており、とりわけ応用的なB問題で顕著な成績だったと発表している。</p> <p>小規模校には様々なデメリットがあるという説明だったが、小規模校のメリットについてもよく見ておく必要がある。1988年に国立教育政策研究所がへき地校とそれ以外の学校の実態調査を行い、へき地校には①教員1人あたりの児童数が少ない②不登校児が少ない③授業中に質問や発表の機会、役割や責任を果たす機会が多く、自主的・協力的な態度の育成が容易④教師と児童の緊密度が高いこと⑤きめ細かな指導が容易であることを挙げている。現在でも通用する内容である。</p> <p>2019年に朝日新聞に奈良県の中学1年生の投書が掲載されていたが、その中学生が卒業した小学校は非常に小規模で、児童数は54人と1学年の人数も少なく、他学年ともよく遊ぶ、一人ひとりの名前も知っている。挨拶日本一をめざす学校で、やらされている挨拶ではない。恥ずかしがりの子どもでも遊びに誘ってもらえるなど、小規模校で良いところがある。そのような母校を誇りに思う、といった内容であった。</p> <p>このように、小規模校ではいけない、ということはない。</p>	<p>小規模校においても、小規模校としてのメリットがあると認識している。例えば、学校全体で児童生徒の顔が見える教育ができる、関係が築けるといったメリットがある。</p> <p>一方、小規模校であるが故の課題も大きいと考えており、例としてクラス替えができないため人間関係が固定されやすいということが挙げられる。</p> <p>これからの将来を担う岸和田市の子どもたちが、一定の集団規模の中で社会性や協調性を育んでいくこと、多様な考えに触れることは非常に重要だと考えており、学習面においても、学校全体の集団活動が幅広く実施できるというメリットもあり、取組が必要であると考えている。</p> <p>そうした考え方の根拠については、様々な研究者がそれぞれの考えを述べているところ、国においても手引きを策定する際に、学識経験者を含む審議会の中で十分に議論を重ね、12～18学級程度の規模が望ましいと表している。</p> <p>国の考え方だけではなく、教育委員会としても審議会を設置し、そこにおいても12～18学級が望ましいという答申をいただいたところ。</p> <p>更に、児童生徒や保護者、教職員を対象にアンケート調査を実施したところ、小中学校いずれも12～18学級程度が総合的に好ましいという結果であった。これらが根拠足り得るものだと考えている。</p> <p>へき地、過疎地と言われる地域においては、本市と比較して面積当たりの学校数が非常に少なく、通学区域も格段に広いなど、学校の統合・再編が非常に困難な地域だと考えている。そうした地域と本市の状況を比較すると、同じように並べて議論することは難しいと考えている。</p> <p>全国学力テストの結果について、本市においては規模の大小による影響は一概に表れていない。テストの結果による学力だけではなく、学習指導要領に示される、主体的・対話的で深い学びに向け、グループ学習等を通じて学力をつけていく取組を行っている中、コミュニケーション能力を高めていく上では、やはり様々な人との対話が必要だと考えている。</p> <p>また、学校規模と学級規模は異なると考えており、学級規模については少人数学級が望ましいという考えである。</p>

番号	日付	校区	発言者	質問・意見概要	教育委員会の回答・考え方
4	11.14(日)	山滝	発言者B	<p>施設一体型の小中一貫校をめざす計画（案）ということだが、この点について、和光大学の山本由美教授が研究しており、著書の中で示すには、全校が小中一貫校である茨城県つくば市における小中一貫教育の検証結果の一つが「中1ギャップは存在しない」というものであった。また国立教育政策研究所が2014年にレポートを出しており、中1ギャップは存在しないとしている。</p> <p>中1ギャップがなくなるというが、逆に小6問題が生じるとも言われている。これまでであれば6年生が最高学年であり、自覚・責任が育まれてきたが、小中一貫校ではそれらが育たない。中学生になっても小学生らしさが残るといった問題が生じる。</p> <p>小中一貫校と、そうでない学校との同規模における比較調査は全国的に実施されていないため、小中一貫校が良いか、悪いかという根拠がない。</p> <p>山本教授の調査によれば、メリットよりもデメリットの方が多いとされる。子どもにとっても、教職員にとっても、地域にとってもそうであり、また防災面でも課題があるということである。子どもにとっての具体的なデメリットとしては、授業時間が45分、50分と異なることにより、小学生が休憩に入っても中学生は授業中ということで、静かに遊ばなければならない、逆も有り得る。学校行事においても、発達段階が異なる中、一緒に実施する上で制約が生じると言われている。</p> <p>特に認定子ども園も併設するとなればより困難である。お互いに遠慮しながら過ごすことになる。</p> <p>小中一貫校における教職員が忙しくなるということも指摘される。学校内での調整、会議が増えることとされており、小中一貫校4校で実施された教職員のアンケートにおいて、「小中一貫校を増やすべきか」という項目で賛成した人はゼロ人だったという。それだけデメリットが大きいのだと思われる。</p> <p>小中一貫校の設置における最大の狙いは学校施設を削減することではないのか、というようにも思う。</p>	<p>中1ギャップについての国立教育政策研究所のレポート内容も承知しているが、本市の状況を見ると、中学1年生で不登校が大きく増加する調査結果もあり、中学校進学後に学校に馴染めないという相談も聞く。また施設一体型小中一貫校というものを考えると、チャイム問題といった課題があることは認識している。ただ、小学6年生から中学1年生の接続をスムーズにする小中連携の取組は10年、20年前から大切にきてきている。</p> <p>今回の小中一貫教育基本方針は、これまで取り組んできた連携教育を一度整理してみようというものでもある。</p> <p>中学校現場で指導していた際も、小学校の教職員とは様々な面で連携を図ってきた。実際に、中学校において非常にスムーズな受け入れができたというケースもあるため、小学校と中学校の連携は大切なことだと考えている。</p> <p>また、発達段階に応じて、グラウンド等の学校施設における危険性というものは確かに存在すると考えている。安全安心な学校生活に向け、今後も検討を重ねていく。他市の事例においては、学校の階段を低学年仕様に統一したり、放課後の活動場所を分けたりなど、様々な対応策を取っている。本市においても安全面には十分に配慮していく。</p> <p>小中一貫校において教職員が忙しくなるということについても、そういった意見があることは認識している。教職員ができる限り負担のないように進めていけるよう、負担軽減のための加配についても検討していきたい。</p>
5	11.14(日)	山滝	発言者B	<p>地域にとっても、小学校がコミュニティの中心であった中、それが崩れるということとは地域の連帯が崩れることにつながる。</p> <p>災害対策にとっても、避難所がなくなる可能性があることからデメリットが生じると懸念される。</p>	<p>今回の取組について、子どもたちの教育を最優先に考えるべきだと捉えており、これから担う子どもたちのために、学習面だけではなく、情報化やグローバル化が進展する中、たくましく生きる力を育む上で適正規模及び適正配置の取組が必要だと考えている。</p> <p>地域コミュニティや防災面の課題については、現在も市長部局と十分に協議をしているところであり、今後、地域の方々とも様々な議論を重ねる中で、課題が生じる点についてはしっかりと解決を図っていきたい。</p>
6	11.14(日)	山滝	発言者B	<p>意見として。学力世界一とされるフィンランドにおいては、ほとんどの学校が小規模であり、小規模だから教育的効果がないということは全くないということ述べておく。</p>	<p>【ご意見として承る】</p>
7	11.14(日)	山滝	発言者C	<p>ゆめみヶ丘の子どもたちは山直南小学校に通い、中学校は山滝中学校に通うと聞いているが、もし学校統廃合となればどうなるのか。包近・山直中町においては山直中学校の方へ行くと聞いているが。</p>	<p>岸の丘ゆめみヶ丘や、稲葉町、積川町の方は、現在山直南小学校に通学しているが、今回の計画（案）においては、小学校から（仮称）山滝小中一貫校に通学していただくという内容となっている。また山直南小学校区においても説明会を実施していくが、現状はそういった学校配置を検討している。</p>